

Kontyû, 37 (4) : 463-465. 1969

春川忠吉先生を偲ぶ

安江安宣

Memory of Dr. Chukichi Harukawa

By Yasunobu Yasue



本会名誉会員春川忠吉先生が 突然脳軟化症のため倒れられ、京都下鴨の自宅で加療中との電話連絡を京大内田俊郎教授からうけたのは昭和43年12月12日夜のことだった。とりあえず数日おいてお見舞にあがったところ意識はお確かでおられたが、ご養生の甲斐なく同22日に黄泉の客となられてしまった。わが国昆虫学界のためまことに哀悼の至りにたえない。

大正昭和を通じて大学ご卒業以来56年間にわたる先生の農業昆虫学に関する150数篇にのぼる業績の数々はそのまま日本昆虫学発達史と申しても過言ではなからう。先生の個々のご研究についてはすでに他の学会誌や春川博士記念論文集に詳述されているので本文ではふれない。

先生は越後の山村、ちょうど信濃川と魚野川の境になっている山脈のほとんど頂上にちかい小さな部落のご出身で小学校も村の分教場へ入学されたくらい、いまのことばでいうならば過疎か僻遠の地であったのであろう。だから生き馬の眼をぬくような都会型とはおよそ縁のない地味なご性格で、何事につけ控えめであった。赫々たるご専攻の学界や教育界におけるご功績にもかかわらず、行政方面のお仕事にたづさわられた場合には先生のご真意に反してとんでもない誤解をうけられたことも無きにしもあらずで、なかなかのご心労であったようだ。いわば先生は純粹の模範的研究者であられたというべきであろう。

先生は大学院においてわが国近代昆虫学の開祖とも申すべき佐々木忠次郎博士に師事され、横井時敬博士のすすめでおりよく新設された大原農業研究所へ新進気鋭の意気をもたれてご赴任された。同所にあってはそれまで日本では分類学、形態学が主となっていた明

治期の流れを伝える昆虫学に、20世紀初頭の欧米における斯界の傾向、とくにイリノイ州立大学の Shelford 教室において学んでこられた環境に重点をおく実験生態学的研究をわが国の昆虫学界に導入されたご燭眼は今日隆盛をきわめて世界的レベルにある個体群生態学の基礎となったものといえる。

先生はまた80才のご高令に達せられても頭髪も黒々と、ご病気になるまではいわゆる老化現象もおみうけせられず、昆虫学会大会などはほとんど毎週ご出席になって、熱心に若い研究者連の研究発表を聴講しておられたのが眼にうかぶ。筆者が頂いた最後のお手紙は昭和43年7月24日付のものだが、「…小生この頃生態学を卒業しかけているところで貴報文を十分に評価する資格はありませんが研究を楽しんで居られる様子が良く感ぜられて愉快であります…」となっている。私事にわたり申しわけないが、筆者の研究方向が昆虫生態学の本筋からはなれていることに対する温い恩師の最後のご注意だったのだろうか？

春川忠吉博士(1887—1968) 略歴

- 明治20年 2月18日 新潟県中魚沼郡中条村西枯木又(現十日町市)、春川良吉氏二男として生る
- 明治30年 飛渡尋常小学校卒業
- 明治35年 十日町尋常高等小学校高等科卒業
- 明治40年 新潟県立小千谷中学校卒業
- 明治43年 第一高等学校卒業
- 大正2年 東京帝国大学農科大学農学科卒業(大学院入学)
- 大正3年 財団法人大原奨農会農業研究所研究員(種芸部病理昆虫主任)
- 大正9年 文部省在外研究員として農業昆虫学研究のためアメリカ、イギリス、フランスに留学(大正12年帰朝)
- 大正10年 財団法人大原奨農会農業研究所昆虫部長(昆虫部独立)
- 大正14年 東京帝国大学より農学博士の学位を受ける
- 大正15年 京都帝国大学農学部講師(応用昆虫学特論)
- 昭和3年 東京昆虫学会評議員(10年まで)
- 昭和4年 財団法人大原農業研究所昆虫部長
- 昭和10年 日本学術協会賞を受ける、日本昆虫学会評議員(23年まで)、財団法人大原農業研究所評議員(27年まで)
- 昭和11年 京都帝国大学教授(農学部昆虫学講座担任)、正六位
- 昭和12年 財団法人防虫科学研究所理事、応用動物学会評議員(31年まで)
- 昭和13年 日本昆虫学会第2回大会委員長
- 昭和14年 満州国および中華民国へ出張
- 昭和15年 日本昆虫学会副会長、日本昆虫学会第4回大会委員長、従五位
- 昭和16年 学術研究会議会員(文部省)

1969

KONTYŪ

465

- 昭和17年 勅任教授，正五位，京都帝国大学評議員（19年まで）
 昭和22年 京都帝国大学教授停年退官，岡山県立岡山農業専門学校長（24年まで）
 昭和24年 岡山大学教授，初代農学部長（26年まで）
 昭和27年 日本昆虫学会評議員（32年まで）
 昭和29年 山口大学農学部非常勤講師（31年まで）
 昭和30年 日本昆虫学会中国支部会長（32年まで）
 昭和31年 第8回岡山県文化賞を受ける，日本応用昆虫学会名誉会員
 昭和32年 岡山大学教授停年退官，同年岡山大学名誉教授，同年8月武田薬品工業株式会社研究部顧問，日本応用動物昆虫学会名誉会員
 昭和35年 日本応用動物昆虫学会昭和35年度大会会長
 昭和40年 日本昆虫学会名誉会員
 昭和42年 勲三等瑞宝章
 昭和43年 12月22日逝去，享年81才，従三位追叙，法名：忠光良正居士

会 報

日本昆虫学会第29回大会記事

第29回大会は1969年10月1日（水）および2日（木）の両日島根県松江市殿町，島根県民会館で開催された。山陰の地では日本昆虫学会創立以来初めての大会にもかかわらず176名が参加し，会員による65題の研究発表が行なわれ盛大のうちに終了した。

第1日（1日）県民の福祉増進と文化の向上を目的として作られた真新しい会館の中ホールにおいて9時過ぎ島根大学農学部教授近木英哉大会会長の開会挨拶の後，生理・生態は会場を3階会議室に移して，午前10題，午後13題の研究発表が行なわれた。分類・形態は引続き同ホールにおいて午前11題，午後11題の研究発表があった。午前の一般講演終了後正面玄関において記念撮影を行なった。午後の一般研究発表の後，愛媛大学農学部立川哲三郎博士による特別講演「ニュージーランドの自然」があり，珍しい野鳥の生態や美しい風土が録音を混えてのカラーズライドで紹介され満場をすっかり魅了した。18時からホテル一畑の和式大宴会場において懇親会が開かれ128名が出席した。風光明媚な宍道湖を眼下に眺め，日本料理を賞味しながら安来節その他の郷土芸能に旅の疲れも忘れ，秋の一夜を談笑裡に旧交を温めることができたのは幸であった。

第2日（2日）午前9時から中ホールにおいて午前11題，午後9題の研究発表が行なわれた。午後の研究発表に先だって日本昆虫学会長渡辺千尚博士の学会長講演があり引続いて総会が開かれた。午後の研究発表後双翅・半翅・蜻蛉の諸分科会が3階会議室でもたれ熱心な話し合いがあった。

大会終了の翌日（3日）の見学旅行は申込者の都合により予定コースを変更して，出雲大社，日御崎，大山を尋ねた。強行日程であったが山陰の風物に心ゆくまで親しんでいた